

[研究ノート]

## 子どもの実態を踏まえた授業内容の在り方

森 光 義 昭・関 聡

### The Way of Contents of Lesson Based on Actual Condition of Child

MORIMITSU Yoshiaki & SEKI Satoshi

#### Overview

Modern children are growing up in an information-rich environment. For example, parents who are raising their children are more aware of the fact that they spend a lot of time searching for parenting hints through the Internet rather than having more time to contact with their children. In addition, there are many cases that children are nursed by video software such as television and DVD. Therefore, it can be said that it is one of the future tasks how to make use of its characteristics in childcare in the current trend of society.

Therefore, in this study, as a way of teaching courses in higher education, to clarify the actual state of the recognition of what is the subject at the nursery school by survey and to examine the way of curriculum formation of teaching subjects in higher education Unidirectionality.

As for that, it will come to see the viewpoint of what students aiming for nurseries should learn by showing curriculum based on pedagogical point of view based on the characteristics of contemporary society.

Key words: Modern society, Actual condition of children, Responding to children,  
Living academic ability, Course content, View of new academic

キーワード：現代社会，子どもの実態，子供への対応，生きた学力，授業内容，新しい学力観

#### はじめに

我が国は1950年代半ばから1970年代初頭にかけて科学技術の発展に伴い、工業製品の大量化と精度化が図られ高度経済成長の時代を迎えた。産業構造が変化し人々の生活の様式も変化した。特に現代の子どもたちの実態との関わりで見みると、その影響を受けているものの一つに家電製品をはじめ様々な工業製品が大量に出回ったことが挙げられる。以前は家族の誰もがそれぞれの家事労働を分担しその役割を担っていた。

家庭生活を成立させるためには、家族の一人一人が自分の出来ることを実行しなければならなかった。そのような過程において、自ら養われていたのが、人への思いやりや協働意識であった。そこに、そのような体験をすることによってボランティア精神が芽生え養われてきた。しかし、最近では家電製品が生活の中に溶け込み、いわゆる炊飯、洗濯、掃除等の家事労働のほとんどが電気エネルギーの力を借りてボタン操作一つで行なえるようになった。これまで人が為してきたことを簡単に行うようになり、人々は

日常生活でそれほど努力をしなくても何とかするという意識に変化し、必ずしも家事労働を分担しなくても家庭経営が成り立つようになっていっているように思われる。

また、家族の者が一つの居間に集まり、食卓を囲みその日の出来事をお互いが語り合うという光景が日常的な日本の伝統的な生活空間であり、家庭には基本的な生活習慣を身につけるといふ家庭教育力が存在した。しかし、最近では家族の誰もが仕事を持ち、諸般の事情を抱えており、子どもは学習塾、お稽古ごと、社会スポーツ等があり、家族の者が一同に会してコミュニケーションをとる機会が極端に減少している。

一方、これまでの地域における情報等は地域住民の触れ合いの中で得られたものであったが、地域住民の力を借りることなく生活が容易になり、このような便利な生活は近隣の人々の結びつきも遠ざける結果となっている。したがって、最近では少子化の影響もあるが、大人の地域での生活空間が減少したことによって、子供会が成立しない地域も出てきている。家族の家事労働分担や地域における協働作業等はまさにボランティア活動であるが、家庭や地域の生活様式が変化したことによって、人や地域に対しての奉仕的活動の機会が少なくなっている。

そのことから、現代の若者はこのような社会の情勢によって育てられているため、総括的にいえば人間関係が上手くつくれない、人とコミュニケーションが取れない、社会参加体験が少なく奉仕的精神が希薄である、協働活動が不得手である、目的意識や達成目標への気迫が薄い等が傾向として現れてきている。現在の若者の姿が特徴的に現れてきているのはこのような生活状況が起因しているとみられる。そのような事情から、保育者の資質・能力の向上を図るために、これからの高等教育機関として教職課程における教員養成の在り方を検討する中で、保育現場との関連を意識した授業展開が求められるのではないだろうか。

そこで、本稿では現職の保育者が日々子どもに接している中で、現代社会の特徴が子どもにどのように影響していると認識しているかを把

握する。その上で、子どもの実態と社会の状況に対応した高等教育における教職課程、とりわけ保育に関わる科目の中での演習を伴った授業において学生に提示する課題の在り方を再考するための手掛かりについて述べる。

## II. 現代社会における保育者像

### 1. 保育者に求められる社会観

現代社会をどのように捉えるかということは保育者の子どもの見方を規定する根拠になる。また、それによって子どもに与える教材解釈にも関連してくる。以前はよく地域の広場で子どもたちの元気な声が響き渡り、夕方遅くまで遊びまわり、日暮れと共に家路に辿りついたものであった。しかし最近ではこのような光景を見ることは非常に少なくなった。その様子の実態は地域によって異なるが、子どもが群れをなして遊ぶ姿が極端に少なくなっている。いわゆる少子化と言われる現象が生じているのが現代社会である。このような社会は子どもたちにどのような影響を与えているのだろうか。少子化の課題の最たるものは幼少期に必須とされる原体験をする機会を持つことが出来ないということである。この原体験の不足によって様々な課題が生じている。原体験とは将来社会人となるべき諸々の要素の基礎となるものであり、しかも幼児期でなければ意義が存在しない体験のことを指している。特に現代の若者は少子化によって異年齢における人との交流が少なく、人間関係のつくり方や人との関わりを通しての人に対する思いやりや共感する心情などが希薄になっている。

この少子化という時代や社会の変化によって子育てを取り巻く環境が大きく変化している。変化の一つはかつての大家族から核家族化が一般化したことや地域コミュニティの結びつきが少なくなり、子育てが一人に任せられ負担が大きくなっていることである。したがって、子育てに関する相談相手や子育て仲間の減少に伴って、人とのコミュニケーションが取れずに、ストレスや悩みが増加している。このように、現代で

は子どもを持つ家庭にあっては子育てを困難にしている要因が増え、また、これからの社会はフルタイム就労を希望する女性の増加や労働形態の多様化等を受けて、さらに少子化を加速させている状況となっている。そこで、今子育てをする支援体制の対応が大きく取り上げられている。

## 2. 保育者に求められる人間関係

ヒトが人として形成される要因の基礎は幼児期に凝縮されている。人間形成の要因としては次の3つが挙げられている。一つは感性の形成である。人間は感情の動物であると言われていたが、人は誰でも喜んだり、怒ったり、哀れんだり、楽しんだりしながら生きている。つまりよく言われる喜怒哀楽がそれである。その中でも特に感性は幼児期に体得する側面が大きい。しかし、その要素は生まれながらにして持っている、外的要因、なかでも人との関わりにおいてのみ芽を出し育っていくものである。しかも、この芽を出し育つのは幼児期に限られていると言われている。例えば、「狼少女」の事例が伝えているのは、①ヒトは人間に育てられないと人間にならない、②感情は人との触れ合いによって育つ、③感性は体験によって人間を成長させる、④人間の基本的な感情は幼児期でないと育たない、⑤表現力は人との関わりによって育つ、⑥運動能力（身体活動）は幼児期に養われる、⑦幼児期に人間としての発達の基礎が養われるということである。その意味で人間の発達過程における教育の時期的視点でとらえると、幼稚園は最も重要な教育機関であると考えている。また、二つは知的要素である。「人間は考える葦である」と言っているように、この思考するという活動は動物の中でも人間特有のものであるとされている。人間が生活に必要な知識を必要とするのは、物事を見つめ、考え、それによって正しく判断するための資料がなければならぬからである。また、実生活において、自分の考えを相手に正確に伝えるためには表現力を身につけなければならない。特に表現力の基礎は幼児期にあるとされているので、この時期の

表現力を身につける教育は重要な活動である。三つは身体的発達である。親心を表す言葉に、「這えば立て、立てば歩めの親心」というのがあるが、新生児の時は言うことも出来なかった子どもがわずか3ヶ年ぐらいいの間で立って、歩いて、走ることが出来るようになる。身体的能力の育成は幼児期のみに限られたものではないが、人が社会生活をするための身体的能力の基礎は幼児期に飛躍的に培われるものである。

そこで、これらのことを踏まえて保育者は具体的に子どもにどのように関わればよいのだろうか。保育者の何気ない子どもへの語りかけが成長の一步を記すことになることが多い。学生の中には、保育者を目指すきっかけが自分の幼稚園や保育所時代の先生との出会いを挙げているように、人との出会いが現在の自分の姿を形成しているように思われる。そのように感じている人の多くは保育者の何気ない自分への語りかけを記憶に留めているとすれば、保育者と子どものコミュニケーションの大切さを語りかけているように思える。人と人を結びつけるのはコミュニケーションの力であり、この力を身につけることは保育者にとって重要な要素である。

## 3. 保育者に求められる資質能力

保育者は保護者に対して子どもたちが活動していることの教育的意義について理論的に説明する責任がある。現在では価値観が多様化し、園や保育者の考えと保護者の考えは必ずしも一致しない。教育及び保育課題は両者が共通理解をしないと解決していくことはできない。保育者と保護者が綿密なコミュニケーションを取ることがその課題に対する理解の深まりに繋がる。また、保育者自身に目を向けると、保育者はより良き社会人でなければならない。社会人として最も大切なことは社会規範の存在を認識し、組織人として行動しなければならないことである。例えば園の教育目標はその園の所属職員に共通した教育課題であるので、全ての教職員が共通の目標に向かって努力をしていくということが求められる。しかし、現在の若者は前述したような家庭や社会環境の中で育ってきたため

にコミュニケーションの取り方、豊かな人間関係の築き方、社会規範を基盤にした社会人としての協働性を養う方法などを十分に認識していない。また、現代の若者は全てではないが個人または少数で遊ぶことに慣れた状態で育っており、社会性が十分に育っていない。さらに、社会参加の体験が少なく、社会人としての自覚も十分に持ち備えていない。現代人は遊びの空間が個室に限られ、デジタルでゲーム的な遊びに興じ、他と交わりながら遊ぶということに慣れていない。そのことから、グループで活動することにはいささかの抵抗感を持っている。組織成員としての自覚が薄く、自己の考え方を優先させる傾向にある。また、特に日常的に展開される教育活動の中で何が教育的あるいは保育的に問題になるのか、つまり課題の把握力も十分に備わっていない。課題の背景にあるものや原因になっているものを抽出する力や精神的や物理的な面の両面から考え、その課題を解決していくための道筋を立て、解決の方向へと進めていく手順なども十分に理解されていない。このことから、保育者に求められる資質・能力とは保育理念の正しい理解、社会の変化に対応する力、社会人としての適応力などが求められることになる。

そこで、保育者は日々子どもに接し観察する中で、現代社会の特徴をどのように捉え、それが日常生活で子どもにどのような影響をもたらしていると感じているのだろうか。教育職員免許状更新講習の課題（講習認定の資料）として、「子どもの実態を捉え、現代社会の特徴との関連についての記述を求めた。現職の保育者が課題であるとして認識していることを、学生が履修する教職科目のカリキュラム編成の視座に置くことは有効なことであると思われるので、多く取り上げられた3項目の課題について次の章で述べる。

### Ⅲ. 現代社会における子どもの姿

#### 1. 情報社会の変化に関わる子どもの実態

今、情報社会の中であって、子どもは家庭に

おいてどのような生活をしているのだろうか。保護者は子育ての中において日常の家事の仕事に追われ、子どもをテレビやVTRに任せ、保護者が子どもに直接関わるのが少なく、子どもは人間の生の声を伝え聞くことができず、「人の話を真剣に聞くことができない」ようになってきている。また、人との会話による話の伝達ではないため、自分が見たい時だけ見るという、自分の意のままの行動をとる習慣が身についているため、「話しを落ち着いて聞けない」子どもが多くなっている。また、一人でテレビを見たり、聞いたりしている関係で、保育所や幼稚園（以降、両者を園で表記する）で保育者が読み聞かせをしても、子どもは勝手に「読み聞かせに口を挟む」などの行為もみられる。日頃が情報媒体との関わりの中での生活であるため、園では保育者が子どもに絵本や紙芝居などで呼びかけても「表情が豊かではなく呼びかけの反応も鈍い」や「絵本に興味を示さない」であるとか「絵を描きながらない」傾向がみられる。さらに、そのような子どもの生活の多くは室内であるため、戸外での生活体験が少ないため、「戸外遊びを嫌がる」子どもが多い。少子化や核家族化とも相まって、家族の者と接する機会も以前よりは減少傾向にあり、日頃からコミュニケーションをとる機会が少なく、「自分の気持ちを伝えることが出来ない」や「意見を主張できない」などの子どもが増加している。また、そのことから、「表現することができない」という現象も情報社会の影響を受けていると思われる。

情報機器は人々の生活にとって欠かすことのできない便利なものとなっている。パソコンのインターネットは知りたい情報を素早く手に入れることができる。したがって、世間には豊富な情報が溢れている。しかも、労せずして手に入るというのが大きな特徴である。しかし、これらの情報機器の難点は人を介しての伝達ではないということである。したがって、今の時代はコミュニケーションをとる機会が極めて減少しているということである。現代の若者はSNSなどで連絡を取り合っているが記号としての文字の媒体は本来のコミュニケーションの姿では

ない。

視聴覚機器で取り扱っている子ども向けの情報は図や絵を電子の作用によってデジタル化されているものであり、現実的なものではない。したがって、子どもが絵本などから遠ざかる傾向にあるのは時代の流れのような気がする。また、バーチャル体験が幼児期に不可欠な原体験の機会を奪っている感がある。テレビやビデオの視聴が子どもにとっての主流になるとどうしても屋内という空間に限定される。したがって、戸外に出て野原を駆け回るという体験は少なくなってくる。そのことは身体を動かすという機会からは遠ざかることになる。

ところで、絵本の持っている本来の姿は人間関係の中における媒体として存在するものである。つまり、絵本の読み聞かせの役割は保育者や保護者が絵本を媒体として子どもに思いを伝えるものである。しかし、現在は絵本をゆっくりと子どもに直面しながら読み聞かせをするような時間的なゆとりは少ない。テレビを使って絵本の肩代わりをさせているところに課題を抱えているように思われる。

## 2. 家庭生活の変化に関わる子どもの実態

今、生産技術が格段に発展し、産業社会と呼ばれるようになって久しいが、経済流通の高度なシステム化によって、各地に生産の拠点をつくり出している。その結果、全ての人々が働き手として各地に向いて就労するという体制が取られている。また、海外に市場を求め企業もあるため、労働者の多くが単身赴任をせざるを得なくなり、本来の家庭生活を拠点とする生活体系が取れなくなっている。幸いに住宅事情は改善され、家庭から離れて生活する条件は整えられており、簡単に家庭を離れることが容易になった。そのため、現在は単身赴任というスタイルが特別なことではないという状態になっている。そのことから、家人は保育者であり働き手でもある。また、ある時は保育よりも仕事を優先せざるを得ないようなこともあり、家庭教育の根幹である基本的な生活習慣を身につけるということが十分にを行うことができにくい状況

もつくり出されている。「箸が使えない」、「少食で、好き嫌いが激しい」、「食事に時間がかかりすぎる」、「排便が不規則」、「清潔感が身につけていない」、「生活リズムが取れない」などは子どもが幼少期に躰として受けておかなければならないことが徹底していない現れである。

家庭における食事についても現在は以前のように家の誰かが専門的に食事をつくるというのではない。出来合いのものを食卓に並べたり、あるいは外食によって子どもの好きなものを食べさせたりしている場合もある。そのため、一概には言えないが栄養のバランスをとることが困難になったりしている。「疲れたと言って座り込む」、「夏バテで直ぐに疲れる」という子どもがいるのもそうした事情が関係しているように思われる。

一方で、少子社会ともいわれている現在、子どもが少ない分、一人の子どもに関わりを持つ機会が多くなり手が行き届くようになる。そのため、子どもは何でも親がかりの育ち方に慣れ、園でも保育者任せになり「自主性が育っていない」子どもや「依頼心が強い」子どもが多くみられる。また、「登園を嫌がる」子どもがいたり、登園時保護者から「離れることができない」という母子分離ができていない子どもがいる。

また、家電製品の普及にも目覚ましいものがあり、家電製品の大半が家事の担い手として大きな役割を果たしている。この家電製品が導入される以前は当然人の力で行われていた。炊事、洗濯、掃除など家族の者が分担し協力し合って家庭の経営にあたっていた。家族の全員が協力をし合わないと家庭は成立しなかった。その役割分担を実践する時、無意識に奉仕的精神によって支えられていたように思う。最近ではそのような状況の課題を解決するために、小中学校では特別活動の時間に奉仕活動を行う機会を設定している状況である。今は家の中でお手伝いをするという経験が少ないため、奉仕的精神が育っていないため、園では「当番活動を嫌がる」という子どももいる状況である。

さらに、現在は市場に豊富な商品が出回っており、欲するものは何でもすぐに手に入る状態

であり、商品に何か不都合がでた時、修理することなく買い替えるという生活スタイルになっている傾向があり、「物を大切にしない」、「片付けをしない」などの実態がみられる。

### 3. 人間関係の変化に関わる子どもの実態

近年のように社会の仕組みが複雑になると、人間関係についての対応の在り方も多様化が求められる。民主主義社会の中で個人の考えや行動が尊重される一方、集団生活を形成している社会の在り方について、複雑な立ち位置が要求される。つまり、自分の考えで行動しようとすると、社会の秩序の面から批判されたり、規制をされたりすることもある。以前はそこで生活している人々が協力し合わないと社会そのものを成立させることはできなかった。自分一人の力では何をすることもできなかった。そこにはある意味統一された価値観が存在していたため、社会全体の規律と秩序が守られていた。しかし、現在では人々の価値観が多様化し、物の豊富な社会であって、他人を頼らなくても、自分一人でも何とかするという意識が強く働くようになると他人との関わりを避けるような傾向が出てくる。そのような大人社会で子どもが育つと子どもにも少なからず影響されることになる。例えば保護者自身が他人との関わりを避けるようになると、子どもも友だちとの触れ合いが少なくなり、「無口で人と話をしたがる」、「特定の子どもとしか遊ばない」ような子どもが現れたり、日頃からあまり、人に接する機会がないため、園では、「いつも友達遊びを傍観している」子どももいる。

また、少子化の関係もあって子どもは成育の過程で家人以外の人と接する機会が以前より少なくなっていることもあって、「保育者に馴染んでくれない」や「心を開いてくれない」子どもも以前より増加の傾向にある。家庭の中でも一人で育った子どもが多く、園の生活場面においても他人と接することに慣れておらず、「集団活動を嫌がる」、「異年齢の子どもと遊べない」子どもがいる。他人と話す機会や経験も少ないので、保育者が園で子どもに質問を投げかけても

「受け答えをしない」、「小さな声でしか話せない」などの子どもも見受けられる。

家庭も小さな社会の一つである。家族構成が核家族にみられるような小規模になればなるほど社会を構成しているとは考えにくい。現在の子どものような家庭という社会に育っていることが以前より多くなっているため、社会の要因であるルールや規律という面が意識化されていない傾向にある。園においても、「自分の思い通りにできる」と思っていて、「ルールが理解できない」子どもがいたり、「ルールが守れない」子どもがいる。

一方で、人と会ったら挨拶をするということは基本原則であり、基本的な態度の育成として幼児教育では重視している事柄である。しかし、最近では防犯上の危機管理の面から、「知らない人から話しかけられたら返事をしない」、「ついていけない」というような相矛盾するような取り扱いもあって、まさに現代社会の特徴を象徴しているような気がする。このような社会現象からくる事柄を幼児教育の基本としてどのように捉えていくかということも一つの課題であると考えられる。

そこで、この章では現職の保育者の子どもの姿から映し出される課題を現代社会の特徴と関連づけながら見てきたが、これらの子どもの実態や保育者の認識から、学生がどのようなことを学修しておかなければならないかという視点に立ってその考えを次の章で述べる。

## IV. 社会の特徴に対応した授業内容の検討

### 1. 情報社会への対応

子どもの姿から見た時、現代社会の中で最も顕著に現れているのは情報に関わるものであろう。特に現代の若者は情報社会の中で生まれ育っている。コンピュータの出現は私たちに何をもたらしているのだろうか。通信機器の発達によって大量の情報が瞬時に私たちの手元に届いている。以前は辞書や図鑑を開いて情報を得ていた、もっと言えば現場に出向き観察したり、人々と接しながら、コミュニケーションを図り

ながら情報を得るとというのが通常の方法であった。例えば、知らない所に行つて或る場所を知りたい時、現地の人に尋ねることによって情報を得ていた。そこには人との交流が発生していた。つまり、自然体の中でコミュニケーションをとっていた。しかし、近年ではカーナビによって必要な項目を入力すれば瞬時に情報を伝えてくれる。このような方法では人との関わりがなく、機械とのやり取りのみで成立する。そのことから、特に影響を受けるだろうと思われているのがコミュニケーション不足の問題である。携帯電話に関わるトラブルは年々低年齢化の傾向にある。文字による意志の伝達が主流となっている今日、自分の思っていることが本当に相手に正確に伝わるかは甚だ疑わしいところである。本来のコミュニケーションとは人と人が対面して会話することを指している。現代の若者が携帯電話に依存するあまり、人と交わることを避け、対面することを苦手とする人が多くなっている。

そこで、授業実践において総合演習のみに頼るのではなく、講義形式の科目においてもお互いが事例を出し合い、そこに含まれている課題を分析し、ディスカッションによって討論を重ね、言葉の選択能力と表現力を身につけ、保育者が関わる人々との人間関係を構築するためのコミュニケーション能力を身につける授業展開をしていかなければならないと考えている。

また、最近ではパソコンの発達によって情報そのものが電子化されている。テレビやDVDソフトなどは鮮やかな絵を提供してくれる。しかし、この絵は人工的に作られた電子の作用によるものであり、自然が織りなす美しさではない。どこことなく肌で感じるような温もりからは遠ざかっている感がある。そこで、例えば実践の試みとして、保育に関わる科目の中で、アナログ的な絵本などに触れる機会を多くつくることが考えられる。最近絵本が豊富に市場に出回っており入手しやすいが、自らが絵本の製作を行えば絵本作家の意図や心を読み取る力が養われることになるだろう。この学修が子どもたちの心を捉えた絵本の読み聞かせの力に発展す

ることに繋がる。つまり、自作による絵本の読み聞かせや課題解決のためのディスカッション等によって学生自身が自己表現力を身につけていくための授業内容を設定しなければならないだろう。

## 2. 少子・核家族・福祉社会への対応

現在の家族構成は親と子の関係のみで構成されている核家族が多くなっている。以前は四世代で構成されている家族構成は特別なことではなかった。このような家族構成であると年齢的に相当の開きがあり、例えば、料理を作る場合でも年齢に応じた食事を準備するといったことは当然のことであった。そのような環境の中で子どもが生活すると当然年齢を意識せざるを得ない。しかし、核家族という家庭で育つと、親と子どもとのみの関係では世代という感覚がないため、世代間意識が希薄になりがちである。社会における組織成員は異年齢集団によって形成されているのが通常である。社会では年齢差に応じた対応や言動の在り方が要求されるが、今の若者が社会での確かな態度がとれないのはそのためである。相手の存在を意識できないと思いやりの気持ちは育ちにくく、協働の意味を理解することもできにくい。

また、福祉の問題は少子・核家族と関連している。家族における相互扶助は奉仕の精神に支えられているものであるが、二世代間ではそのことをそれほど意識しなくてもよい。学生もそのような家庭環境で生活しているので、園の子どもと同様に家庭社会というものを異年齢集団として感じ取っていないと思われる。そこで、このような意識の改革を目指すためには、例えば、学年を超えた授業形態なども将来的には考えられるのではないか。また、大学におけるボランティア活動の時間も単位化して設定するなど、取り入れて取り組んでいくことも考えられる。さらに、高等教育機関のカリキュラム編成の視点の一つとして、キャリアガイダンスともタイアップしながら、園の教育実習や保育実習とは別に園児サポート活動の機会をつくり、ボランティア活動と兼ねながら推進できる授業内

容を検討する。

さらに、家庭の問題は地域社会の繋がりとも関連がある。社会制度として、児童手当、介護保険などをはじめ、高齢者施設の整備などが行政の政策方針で進められ、制度や施設面の充実が行われている。そこで、大学においては心の教育と実践的な活動の充実を図るために、地域の福祉関連施設と大学のカリキュラムをタイアップすることによって、これまで学生が経験したことの無い新たな感性によって保育者としての資質及び能力を身につけることができるのではないだろうか。

### 3. 人間関係の構築への対応

以前、「向こう三軒両隣り」という言葉があった。近所に住むものは家族同様の意識で繋がりを持っていた。当時はお互いに協力し合わないと生活していくことに不便な面があった。したがって、そのような生活の中から自然のうちに隣人との人間関係ができていた。最近ではプライバシーに関わるのでお互いが干渉し合わないことがエチケットであるというように言われている。松尾芭蕉の有名な句に「秋深し隣は何をする人ぞ」というのがあるが、これは秋が深まる中、灯りがこぼれる隣家の住民に想いを馳せる人間的な温もりを感じる句であるが、最近の若者は、人間関係の煩わしさから逃れる傾向があり、隣の人が何をしているのか気にしないでそっとしておこうという句であると解釈するものもある。このような認識の下では円滑な人間関係を築くことは容易なことではないように思われる。

また、最近の子育てに関する意識も変化しており、子どもを外で遊ばせることは他人とのトラブルに巻き込まれたりトラブルを起こしたりする危険性があるため、無難に室内で過ごさせるという考えもある。このような状態では人間関係を築くことはできない。以前、「子どもは地域によって育てられる」と言われていたが、地域においても大人が子どもに関わることの重要性に対する認識が希薄になっている。人との関わりによってトラブルが生じることを恐れ、出

来るだけ関わりを持たないようにする傾向がある。このことも人間関係を築く機会がつかれないことになる。

このような親の保育に関わる意識の変化や社会情勢の変化の中で生まれ育った学生に保育者としての力量形成をどのようにして図っていくかということになる。そこで、大学における授業内容の在り方の一つとして授業の形態をできるだけ多く集団（グループ）学修を導入し、学生同士が課題解決のためにぶつかり合い、切磋琢磨する過程で人間関係を築くことの重要性に気付けば、そのことが保育者としての資質に付加されることになるのではないだろうか。また、高等教育における開かれたカリキュラムの編成に着手し、学外研修的な学習内容を検討する。例えば、地域の行事に参加しサポート活動を通して地域の存在を意識し、併せて、ボランティア精神も養い、また、福祉施設を訪問し地域住民との交流を深め、大学は地域と共に存在しているのだという認識を深めていけば、人間関係の在り方を学ぶ機会になるのではないだろうか。

## V. まとめ

大学審議会は平成12(2000)年に「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方」について答申を行った。その中で、グローバル化時代を担う人材の質の向上に向けた教育の充実について、多角的で広い視野に立った人材を育成することを求めている。このことは社会で活躍する全ての分野について言えることであるが、とりわけ、教職に身を置く学生への働きかけは特に重要な項目であると受け止めている。

近年、価値観が多様化している現状にあって、これからの社会を担う若者は責任ある個人としての自覚を持ち、物事に対して複合的で新しい視点に立って、課題を発見し、探求していく姿が求められる。そのためには高等教育における教育の在り方として、国際的な視野に立った時代に求められる能力を育成していかなければならない。そのための具体的な教育課程の編成を行い、教職課程における科目の全てにおいて実

施していかなければならないと考える。

これまでの学校教育における学習は一斉に画一的な方法によるものが主流であった。このことは知識の伝達方法としては一定の成果を取ってきたという評価はできる。しかし、この方法では大学審議会が答申しているように、広い視野に立って主体的に取り組む姿勢がどれだけ養われるかということについては未知数である。これからの高等教育の授業は「学習」ではなく「学修」の文言が示す通り、学生が何を習ったかではなく、何を学んだかということが重要になってくる。そのためには、演習形態は言うまでもないが講義形態でもできる範囲で学生一人ひとりに課題を発見させ、その課題を自分の力で解決していく方法で教師の講義を受け止めていくことが求められる。そのことが主体的に活動することができる人材の育成につながるのではないだろうか。

これまで述べてきたような子どもの実態は同じ時代に生まれ育った学生についても当てはまる側面を持っている。情報化社会の中にあって全ての社会的課題を受け身的に捉える傾向にあるので、授業を通して学生自身の主体的態度が養われるような学修形態や方法を取り入れることが不可欠になる。とりわけ、保育に関わる教職科目にあっては、保育現場の子どもの実態をカリキュラムに取り入れて学修に向かわせる働きかけが重要になってくる。つまり、保育関係の科目に関して学生へ提示しなければならない課題として明らかになったことは、子どもは基本的な生活習慣が身につけていない、主体的に育っていない、豊かな人間関係を構築する術を体得していない、社会性が年齢に応じて備わっていない、豊かな感性が十分に備わっていない、奉仕的精神の育ちが十分でない等々を保育科目、特に教職実践演習を中心にカリキュラム化することが授業担当者に科せられた課題であると受けとめている。

また、保育者と子どもの関わりと併せて、保育現場では人間関係に関わる事象が最大の課題となっている。このことは価値観の多様化がもたらしたものであると考えられる。以前はもの

に対する考え方が一人ひとりの大人の価値観にそれほどの相違はなかった。大人は子どもたちをどのように育てるか、どのような子どもに育てるかなどの価値観がほとんど一致していた。しかし、最近では人々の価値観も多様化し、子どもの人間形成に関わる目的意識や子育ての方法も異なり、園（学校）と保護者や地域住民の考え方に隔たりが生じてきている。特に最近では保護者や地域住民の中には教職の免許状取得者が増加していることもあり、保護者や地域住民が園（学校）教育に対して意見を挟むことが多くなっている。したがって、このような課題に対応するためには教師は確固たる教育理念を確立し、保護者や地域住民に対して教育活動の主旨を説明し、理解を求めることが出来るような能力を身につけなければならない。つまり、教師が子どもにどのような保育目標を掲げてその目標に到達させるか、そのためにはどのような方法をとるかなどの保育者としての説明責任を果たさなければならない。そのためには日々の研鑽と適切な人間関係が築けるような方向づけをしていかなければならない。したがって、大学における授業実践の中で教育実習や保育実習で経験したことを基盤に据え、教職科目の内容に学生自身が教育実習等で体験した幾つかの体験を基にした事例を取り上げて想定される対応の在り方を検討するなど、主体的に学習活動に取り組めるような演習を中心に据えた授業展開を位置づけなければならないと考える。保育者は論理的に物事を広角的・多角的にとらえ、自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことができる能力が求められる。このことにあたっては、授業展開の中で現職の保育者が現実的に直面している課題を事例として取り上げ、討論やプレゼンテーション等を通して研修することができるようなカリキュラムを編成しなければならないだろう。これからの大学教育は学生が総合的な洞察力を形成する方向で、教育内容や方法の改善を図る授業展開が求められる。このことが学生にとってこれまで培ってきた知識や生き方を社会との関係で位置付けてみる機会になると考えている。

## 【参考文献】

- 中留武昭 「大学のカリキュラムマネジメント」  
東信堂 2012
- 文部科学省「幼稚園教育要領」文部科学省2018  
文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館  
2018
- 小田豊・押谷由夫 「保育と道徳」 保育出版社  
2006
- 森上史郎・大豆生田啓友「よくわかる保育原理」  
ミネルヴァ書房 2015
- 天野珠路・北野幸子 「保育原理」 中央法規  
2015
- 汐見稔幸・大豆生田啓友 「保育者論」 ミネル  
ヴァ書房 2014

(2018年3月30日受稿)